

ありし日の記憶とともに

光溢れるモダンな校舎は、どこにいても人の気配が感じられる温もりに包まれた空間であった。ありし日の記憶をたどり、アッセンブリホールから2階へとつづく階段を上がると、北上川を望める方角に、大津波でガラスは破壊されたのか額縁のように佇む大きな窓がある。ふと、外を眺めると、静寂な風景の中に、真っ青な空と対岸の山々の緑が美しく光っていた。だが、そこにあるはずの町並みも田畑が広がる長閑な風景も、校舎にこだまする色とりどりの心地よい声や、日常の中に溢れている人々の暮らしの音はどこにも見当たらない。あの日、川を遡った大津波は堤防を超え、渦を巻き、町を飲み込んでしまったから。海からも大津波が押し寄せ何もかも根こそぎ奪って行ってしまった。どれほど恐ろしかったことか。その脅威を遺構が物語っている。そして、自分と向き合い考える時間を持つことが必要だと問うている。

ここを訪れる人々に立ち止まり考えて欲しい。自然とともに生きていることの意味を。命の大切さを思いはかることの意義を。この地に立ち何を感じ、何を考えるだろうか。心の中に芽生えるものはあるだろうか。感じた思いを言葉にして紡いで欲しい。その積み重ねが明日をつくり、未来の命を守ることへつながっていくのだから。

かつて、地区に沿って流れる北上川沿いには釣り人の姿がいつもあった。足を伸ばせば長面湾があり、子どもたちも自転車で釣りにでかけては夕方まで家に帰らなかった。青々とした田んぼが黄金色に染まると家々では稲刈りが始まる。大きな納屋は米袋でいっぱいになった。正月には、お獅子が家々を回って家内安全・五穀豊穡を祈願する。獅子に噛まれて泣く子ども。獅子の後をついてまわり家々でお菓子をもらうのは子どもたちの役目。釜谷地区の風習である。

ありし日の記憶は鮮やかでもあり、大震災がもたらした体験が記憶を曇らせてもいる。ありのままにいいのだと遺構が語りかけているように思える。確かなことは、この地で多くの人の暮らしがあり、ともに歩んだ豊かな人生があること。そして、これからの人生があること。

わたしたちの記憶の続きを紡いでいこう。ともに未来を拓こう。ともに命をつなごう。